

第4号 6/14
504

ボリューム通信

東北労働二二研究会

1. 6年代左翼反対派的思想、戦略・技術、文化運動、組織を揚棄し、国内一国外交論争に勝利する地下労働者党建設へ向けて前進しよう。
2. 大衆路線と軍事路線を堅持し、而路線を支える鉄の組織を勝ちうる。
3. 革命斗争の組織の中で、自己をコレリア革命派へと鍛えあげよう。

コレリアートの階級斗争の実行についての質 書き その1

――コレリアス主義論議を、我々の活動の基礎とし、現実の革命的左翼の底流を明らかにせしむよう――

「少數派は、批判的な見地からいふに極めてな見地をもつたし、唯物論的な見地の代りに唯心論的な見地をもつたしている。少數派にとっては、革命の道筋力になつてゐるのは、現実の諸問題ではなくて、むしろ意志である。われわれには労働者にこう言う、「諸君は諸問題を変えるためだけではなく、諸君自身を変革し、政治的支配の能力をもつさうになるために、なお5年、20年、50年間といつもの、内亂と民族的矛盾とおもひがちなる」と。ところが諸君はこういふ、「われわれはただちに政権をにぎらなければならぬ。それまでさういふことをしてしまつてもかまひないと。……民主主義者は人民といふことはもつてゐるが、諸君はコレリアートといふことはもつてゐてはいる。民主主義者と同じく、諸君は革命的真義を『革命』という空文句とすりわけている。」

(カーリ・コレリアス『アーバニズムと資本主義の真相』ME主集8巻)

六

マルクス主義戦術論とマルクスの活動の基礎とし、現在の

革命的行動の混乱に終止符を打つのはどうなう。

マルクス・アート「日本の階級斗争の戦術の基礎」

戦術とは何だ。

戦術の一般的性格

一般的性格

アーティリアー卜の階級斗争の戦術

支那 告白

第一章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第二章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第三章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第四章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第五章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第六章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第七章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第八章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第九章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第十章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第十一章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第十二章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第十三章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

第十四章 フロレタリアー卜の階級斗争の戦術

運動に、単純に「スター」、「サムライ」の「シート」により、公然と敵対する事との関係は、決して済然でない。

又、後者たゞこは、自然反応、かくが力ニシテ「身」である、理論に尊に「忠誠」と「忠任」（一貫性）の領域に拘りどもらひて、従つて、実践的には「左」にでも右にでも「感性」で下るのも当然である。

マニクス主義戦術論に基いた系統的活動を肯定し、組織問題に無知一派から諸君が、確実に、果たべや激動期に於て政治警察に、もむらば日本型、黒田人組に懲滅される、帝國主義者と城内平和をとりつむにばかりの問題達に二事である。

2、1のヨリに通じる、さういふ懇意した所蔵、日本に於ける革命的行動の歴史を理解され。

日本の革命史は、日本での紹介が豊富で豊富な、革命論であり、革命派や革新派（社会党・社畜・解放派）論者が「正義」、「革命」等といふ言葉を繰り返すものもある。アーティリアー卜の階級斗争論者たる「革命」、「正義」、「忠誠」等といふ言葉を繰り返すものもある。アーティリアー卜の階級斗争論者たる「革命」、「正義」、「忠誠」等といふ言葉を繰り返すものもある。

例えば、8年半前左翼の左翼反対派的政治の面接題に、左翼派や革新派（社会党・社畜・解放派）論者が「正義」、「革命」等といふ言葉を繰り返すものもある。アーティリアー卜の階級斗争論者たる「革命」、「正義」、「忠誠」等といふ言葉を繰り返すものもある。

一九三五年三月二十日、二回大會に於てアーティリアー卜の道を歩み始めた代表「共产党」や、英國イギリスの左翼反対派（革新派）も「革命」、「正義」、「忠誠」等といふ言葉を繰り返すものもある。左翼の黒田カーネル議員に於いて、日本議院の生命は、60歳以上である。左翼の全議員の投票に賛成したが、左翼議員の票数は、その「ライバル」であった。又、60歳以上の議員が議場を牽引して来た「精神」も、その「ライバル」である。

左翼議論を挙げた事と、現在は長しつつある全世界の革命

たが、60年代に於て、その「ライバル」は、マニク

火の階級三等の試験官として、やがて教諭化し、60年代の左翼団体反米反戦運動に際して、農の革命主体へと躍進するに、極めて大きな影響を与えた。

「我行正經上任處所，都設立碑記，例如」

成熟な段階では、もじれたる極めて傾向で立たないが、四年春から秋にかけて様に、河川は非和解時にならむるの程、本格的な武装冲突を要求する傾向の程、最も危険な傾向として作用するものか、疑ひだされり。

従つて、たゞなるは露の如きが運動の題材となつて、且つ、軍事的立場の最も立派たる特徴の一端である「ハーディガーディー」を我々が繰り返し述じて、ある。理論上、これは實戦とあつた「トライアゴニズム」が、トニーフィス主導戦術論として好色化した事ならびに其に付随する「ヒューマニズム」である。

さて、「田舎者達の政治運動」として表現される問題意識は、いづれも、田舎者達の政治運動としての「統括」として表現された問題意識が、既に問題意識が問題意識として現れる

「アーティストの才能」、「アーティストの才能」の「アーティスト」が「アーティスト」にならぬ。従つて、れども、口早口ハド草履のアマだりた田にかれての「アーティストの才能」が「アーティスト」の「才能」ではないと法則」と宣伝時(理屈)は、何をアーティストにしてやうか。アーティストの才能とは、アーティストのアーティストの才能(アーティスト)と云ふ、不徹底性に隠れ、藝術の藝術的な才能(アーティスト)としてやうな二つのやう。

戴立也、通じて「船足跡」の外見を極めて複雑で、細かい。題材の日本中の傳説的・神話的・歴史的・風土的・社会的・政治的情報が、その中で織り込まれてゐる。題材の多様性は、アーティスト的創造能の豊富さを示すものだ。

六三の内客は、67年以来の日本大蔵省の波の底部に附
かることで、この今日、最も革命的な同志の運動の中に復在して、
する主觀主義的傾向、理論上公算法を發展する第一歩である。

政治過程論」や「革命的政治運動」とは何んぞ書の内容の決定的な境界を鮮明にする事である。日本の革命的左翼の「アーティカレード」は「政治過程の想出の運動法則」という「政治過程論」の名の有名な表現の中に、象徴的に見る事が出来る、「」の意味に於て、甲子に通じ本題は、甲子に通創刊即ち「政治過程論」と我々の新しい出発点にして、一日本マニケ之主氣運動の客觀主義=アーティカレードを史観し、革命的現実主義の活動態度が力ちとづく、一方の間に積極的な展開でやめある。

「政治過程論」の政治理論上の限界だけを、兩度次の三點に整理しておく。

①「大戰術」——「」の表現では「革命的戰術」の内容規定の致命的な程の不完全性。

る、次の様にした問題について

アメニハムアリーの支配能力の動搖危機がへ内閣危機へ体制危機へと發展する過程を時方の内部にロレタニア艦隊の組織を抜け、喪失して國家の集約性をロレタニアア独裁のもとに兼ねておた事、ロシア革命の教訓ならし一ノイシナヒコ齊西ナヘヨリの「一重権力」の状態は、現代もなお最初のロレタニア革命の基本法則である。-----」
「の内容では、無政府主義、社会革命主義、ロレタニアム)を決定的に批判する事はできない。これは、ロレタニア亡に到る「政治革命」の血みどろのダイナミクが表象(ハニニシテ、「革命的戦術」の核心だ、武装蜂起アメニハムアリー

ス曰は、我々がマニケム主義戦術論をじつりと導く。且つ、運動一般にとどまること、曰々の活動、曰々の基礎とし、活動態度の由で、その理論が体得する者の一作業とする事である。

現在の政治的左翼の主張上の薄弱点は、無論可、唯に過度の活動家の政治理論の低水準として認識内容だけにとの根源があるので、つづいて、それが問題な問題な、8月の大革命的左翼のもので、つづいて、ついで貧弱な問題な問題な問題のものである。たゞ、問題の中心にいたるは、二つのたまつてある。

活動態度—問題の中には、各種の問題がある。たゞ、一つで、既成に、既存を長久なる運営問題運動、其二、インテリ一一の口運動及び問題にして半獨立主義的な活動態度にて、問題となつてゐる。

我々は、たゞ、一つの問題を解決する問題、既成問題にて、問題にて、活動に系統性へ系統性の問題だ、大いに以下のようにして、何らかのことをしたて、活動態度の由で、マニケム主義戦術論を体得する事にいたる點からむづかしい。又、マニケム主義戰

新體の本格的な政治的語彙は、明治時代の初期に現れたもので、マニケス主義の翻譯である。従来、日本では、政治的語彙として、政治の翻譯が主とされたが、この時代から、政治的語彙が政治的用語として確立された。

地雷戦争（）敵地に進むるに當り、兵糧（）の往路（）に

だが、バークーに敗去されて以降でもヨニを組織して「反獻體由の全日本反獻活動家に玄範に存在していく、「大學」が自己の頭の中で「解体」した事を、今も嚴として記憶している。彼はこの事実を「我の心の内に抱いてゐる」と語った。

戦争の武器の破壊力の大きさで、兵庫主義運動の「左翼社」の反対とする無線の小切手料金の問題とするが、マニケス主義藝術と無縁の小切手料金の問題では、決してこの数年間の藝術とは経験を教訓しておらず、其の發想ではあるまい。

（三）現在の革命的左翼内部の主觀主義的傾向について
既に述べたように、自然成長的「ラディカルズム」は、階級斗争の発揚が大きければ大きい程、又、その発揚の終息が確実である程、運動自らのタイナリズムにてて、島津又過ぎ去つた後には、大いに演説に陥りいたるものである。

我々は、この病院で施設した二例は、この数年間の試験的調査によれば、其の半数は、口吃だけの「一一」性と云ひ、他の半数は、口吃と並んで、精神障害の併合を有するものである。

この数年間に、正しく教訓化した部分は、この間の間に非開港地で、全人類が起る時代に於いて、最近の權力一疊統が「封鎖」してくれた以上の破防法攻撃一組合は、漁港の権力を防衛し、ヨーロッパや英米を

卷之三

の「太陽鉄道」とは、必ずしも、鐵道と結合して、日本主義の範囲を、以て、「連合国スローガン」が善き鐵道として、二つ一の範囲を形成する。終つて、これが、その範囲を越えて、世界に及ぶのである。

「ロシア革命の偉大な数日の教訓を自分のものとしないが、われわれの活動をさらにひろく展開し、われわれの任務をさらに大胆に提起しよう。われわれの活動の基礎には、現在までの諸階級の利害と全人民的發展の諸要素との正しい評価がある。……つもどうであるるに、大衆の意識の發展が、われらの全活動の基礎であり、主導なる内容である。しかし、ロシアはいたたきて二る、このさうな時機に

の成熟以上のものとして想定すべきである。」この意味に於て、大胆に武装騒起・権力對立へと繋りつむる「本格的な武装斗争」を、思想的にも、組織的にも準備し、60年代に比較的自然成長的運動に依頼して建設ノマニ組織を徹底的に鍛え直すには何ならぬ。」この事を抜きして、武装騒起を組織するのを建設はありえないし、我々は今日この段階斗争の課題に直面に資する事がなく、何も教訓化すべき事だなたつた事は、田中核米等の諸政治組織が、将来の血みどりの決戦でもう要とする事に火種を撒くのである。

したが、②の主張は誤って二点。

第一は、「大衆斗争」とて、階級斗争の遂行主体の広がり及び、階級斗争の或る政治的側面を問題にしており、「暴力斗争」とば「武装斗争」とば、その軍事的側面(兵)・棒・銃・鎗火器や「テロ」、「二二六事件」等問題にしてゐるのに対し、「大衆斗争」と「武装斗争」が対立する概念と理解する事は、明らかに誤りで居るのである。

この誤りに主張は、少くとも五年前から既にかけて、日本階級斗争が「本格的武装斗争」を必要としたという戦術上の、しかもも形態上の問題を、固定化した、實に素朴な政治理解に基づいて居るのである。

この主張は、「政治過程論」の一環として、革命過程が單なる過程としてしか理解されず、弁証法的に理解されてこない事、「小戰術」の外的統括としての「大戰術」の裏面という発想そのものが弱点である。しかも、其の運動を、なにより一つの既定の斗争形態一武装斗争にしつづけてしまふ事に拘らざることも、路口にてアーティニアードの階級斗争の歴史は、刻々變

（二）通説（参考）

（一）の二つの傾向、戦術が、日本の革命運動の中に掲げられてゐるのは、戦術が、単なる個人や、田舎設定の不明確な少人数の内の次元から決定されるに依り、結局、個人や、少人数の恣意的な選擇に戦術が依頼してくるからである。（二）の傾向は、「戦術の不可知識」と呼ぶ事がでざる）マニケズ主義戦術論には「正しく戦術」が存在すると、非常に重複する命題が創出されてゐる。（次に参照）

「正しく戦術」を構成する二つの確信から始めて、我々は当面のヨリ一戦術の当面を検討する事だでさう。

我々は、二とえ本人大國賞してこなしても「戦術の不可知識」者たる（一）の「無党派」活動家に対して、その政治水準を認める、ヨリ一の田舎を田舎にして、「無党派性」を一掃し、彼等のヨリ一を、日本の革命運動の有機的、環に組み込むべくならぬ。

化する社会的現象がいつ現れるのである。従つて、戦術は、極めて柔軟に現れていたものである。ましてや、戦術の部類は、前面に斗争形態に到つては、それを持つ無限の多様性を意識しなければならぬ。

斗争形態の諸問題について、最もなるが、極めて教訓的なので、以下レーニンの言葉を引用しよう。

「すべてのマルクス主義者は、斗争形態の問題を越えて、あたつて、どうこう根本的要素を提出しなければならぬ。オーに、マルクス主義は、運動をなにか一つの肯定の斗争形態にしりつけるに至り、すべての原始的な形態の社会主義とはちがう。マルクス主義は、各種多様の斗争形態をみとめるものであるが、そのナリ、それらの形態を「思ひつく」のではなく、運動の過程で明らかなる革命的階級の斗争形態を普遍化し、組織化して、同時に運動性をもつてゐるに過ぎない。

あらゆる抽象的な公式、あらゆる空論的専門家、無条件に反対するマルクス主義は、進行中の大勢斗争一それは運動の発展、大衆の自覺の成長、経済的及び政治的危機の激化に伴つて、たえず新しく、ますます多様な防御と攻撃の方法を生みにすこくに付けて注意ぶきい態度をも拒否するなどだからマルクス主義は、どんな斗争形態をも拒否するなどとは絶対に誓わない。

マルクス主義は、ある場合だけ裏切可能で、その時機だけ行なわれる斗争形態にとどまることだけではなく、その時の社会情勢の変化にともなつて、その時代の活動家のこうなりの意味なのである。

(3)日本のヨロレタリア革命過程を単純に「激烈戦の発展→正規戦(解説)」に限定する戦術論について。この戦術論は、現在の日本社会の政治・経済構造と、かつての中国社会の政治・経済構造の特殊性の相違を無視し、かつての中国の革命戦争や、現在の一二・三・四革命戦争の発展過程を、そのまま日本の革命戦争に類似させたものである。

「共産主義的戦術の硬直性」は、共産主義の原理の硬直性から、あるいは直接点帰結への「」。というルカーキの言葉は、一元でも正当である。

例えば、我々は、代々木「共産党」の日和見主義者の革命觀と、この戦術論の持つ革命觀との「奇妙な」一致を発見する。即ち前者は、民主連合政府→民族民主統一戦線政府→自由独裁政府と、観念世界で革命過程を公式化し、革命の発展を形而上学的な「ゆるやかな發展」と規定し、従つて日々の活動は、議会における得票数の勘定におけるものに対して、後者は、「議会における得票数」の勘定に対して、獲得した徐々に拡大する鉄砲の数の勘定に置かれているのだ。

日本における革命戦争の性質・戦術論の基礎は、レーニンが簡潔に述べたように「過去の觀点からだけではなく、また未来の觀点からも考察され、しかもゆるやかにこな变化しない進化論者との専俗な考え方による」ではなく、弁証法的に考察され「ヨカル・マルクスレーニン全集第21巻」ではあるはならぬにいたう。

この点でマルクス主義は、太衆的実践のみで学ぶものであり、書齋の「組織屋」が思ひつく斗争形態を大衆に教えるなどと、うねぼれるものではない。……第二次世界大戦の問題は、斗争形態の問題を、みなならず歴史的に考査することを要求する。具体的な歴史的形勢をもそにして、この問題を提起することは、弁証法的唯物論の初步を知らなければならぬことを意味する。

経済的発展の種々の時機には、政治、民族、文化、生活様式その他の条件の違いに応じて、いろいろな斗争形態が前面におこり、主要な斗争形態になり、それに関連して、ある運動の發展段階における具体的な情勢をこまかく考慮せずに、特定の斗争手段の問題に「エヌスチノーナ」を答えるとするのはマルクス主義の基盤をもつておらずにすることを意味する。以上が、我々の指針としなければならない。二つの基本的な理論的命題である。」(『マルクス戦争』)

「大衆的斗争は60年代型斗争であり、武装斗争が70年代型斗争である」という混乱した主張は、実践上では次の危険な道を歩む事を促進する。

即ち、前衛の労働者人民に対する宣伝、煽動を否定し、労働者大衆を決起させ、政治的自覚を促す事を否定し、同時に

毛沢東流に表現すれば「大衆路線」の一方の側面たる「幹部政策」へ堅忍不拔の共産主義者の創出一党建設を困難ならしめる。60年代の前衛の活動が「大衆運動主義」と規定する時、それは、決して前衛が、労働者大衆に依頼し、決起させ、根本的なものは、人間そのものである。」という青年マルクスの有名な言葉は、又、我々が問題にしごりとこていらるることを否定するのではなく、当時の前衛の活動が、マルクス主義戦術論の出来であるのだ。

「根本的(ヨーティカル)であることは、もの」といふその根本においてつかむことである。ところで、人間にところ根本的なものは、人間そのものである。「」という青年マルクスの有名な言葉は、又、我々が問題にしごりとこていらるることを否定するのではなく、当時の前衛の活動が、マルクス主義戦術論の出来であるのだ。

第一章 フロレタリヤート

一 党の階級斗争の戦術の基礎——戦術とは何歟

1. 戰術の一般的性質

戰術とは、或る組織によるつて設定される目的への意識性にそくめた主体的人間的活動の事であり、それは又、或る組織の設定する「究極目的」と「現在の状態」とを媒介する実践的環境であるとモ探言出来る。(注1)

従つて、その組織の設定する「究極目的」は、「現在の状態」に対し、何如なる関係にあるのか、即ち、前者及後者に對して超歴史的に、先驗的に指定された超越的なものか、それとも、前者及後者の中に可能的に存在する内在的なものかによつて、その組織の目的的活動たる戦術は、一貫した目的的それ又、否々々決定されてしまう。

マルシヨアジー(マルシヨア政黨)による階級斗争に於ても、「自由、平等、博愛」に象徴されるマルシヨア的諸理念、「究極目的」は設定されした。そしてマルシヨアジーは、自ら掲げた諸理念の下に、「封建的な、家父長制的な、牧歌的諸関係を、のこすを破壊した。」(マルクス・エンブルスマ共产党宣言)に於て、「一度、マルシヨア革命が実現され、その社会で資本主義的生産様式が支配的になると、又、一方の極に、生産手段を強力的に分離された直接的生産者の登場、しみ

注1 理論と実践、及び組織の關係について。

我々は、一二では、可歴史と階級意識とに於ける、ルカーの組織問題の扱い方を引用するだけに留める。

「……組織こそ理論と実践とを媒介する形態にはならないにならぬである。そして、あらゆる弁証法的関係においては、そのうりに於ける、二の場合にも、理論と実践といふ弁証法的関係の構成要素は、組織の媒介において、また組織の媒介を通じて、はじめて具体性と現実性とを獲得するのである。」
「……組織の認識としておこなはれてきたすべきな所の問題への解説として把握する所以の問題提起は、すでに組織という観点からの問題提起にはならぬなり。」
の二つの問題提起は、状態の検討の立場で、行動の準備と指導の立場で、理論から必然的にその理論にむつともひきわせし行為に導くさうる契機を見出そうとする。したまつてきた、理論と実践とを結合する本質的な諸規定を探し求めるのである。

現在、是非、克服しなければならぬことだな、多くの「無党派」活動家々戦列から去つて行くのは、一般的には次の様な理由をもつている。

それは、彼の活動の「目的設定」の曖昧さであり、從つて、「無党派」という言葉に表現される組織問題への無自覚と、「目的設定」の曖昧さに星々く自己の活動の抽象化の軸の喪失を求められる。

我々は、何如なる理論であろうとも、又、その理論を実践に適用する主体な例え無自覚たうともへ無政

で、自己の労働力を市場に投げ出すことによつてのみしか、自分の生活課題を発揮することができない階級の登場とともに、マルシヨア革命の成果たる諸制度は、自己目的化され、過去の変革の痕跡たる諸理念、「究極目的」は色褪せ、純粹に形式的るものへと変貌し、もはや、一切の主体的活動の現実的指針たりえなくなる。商品形態が社会の普遍的形態となり、全ての人間の生活現象を包摂する時、人間の相互關係は商品の対象性形態として、物象性として立ち現われる。

そして、一こうした物神的なる対象性形態の直前の、イテオロギー的諸規定は、常に資本主義社会の諸事象を超歴史的実在へと、人間にとつて「第一の自然」と、現象化せるものであり、二の内容こそマルシヨア思想、歴史觀・世界觀の本質にせらるる。

我々は、一二ではフロレタリヤ社会では過去を現在を支配し、マルシヨアの「戦術」は、首尾一貫した、皆目的的活動のそれであるが、二の内容こそマルシヨア社会では過去を現在を支配し、これ以上論究しない。

フロレタリヤー(マルシヨア)の「戦術」は、首尾一貫した、皆目的的活動のそれであり、人間の相互關係の対象性形態の直接的・イデオロギー的諸規定たるマルシヨア思想の虚偽性を突き詮す事な出来ない。

我々は、一二ではフロレタリヤー(マルシヨア)の「現存する階級斗争の、つまりわれわれの目前で現におこなわれてゐる歴史的運動の、事象上の諸関係」、「現存する階級斗争の、常に組織問題をはらんでゐる事に注目しなければならぬ。

「……共产党は、実践上には、すべての國々の「……共产党のうう、もつとも確固たる、たゞさず推進してゆく部分であり、理論的には、フロレタリヤ運動の条件、進路、一般的結果を理解する點で、フロレタリヤー(マルシヨア)の他の大衆にささつてゐる。」(共产党宣言)
(凸一猪瀬論者)

2. フロレタリヤートの階級斗争

2. フロレタリヤートの一般的性質

府主義者及びその好例なのだから、理論を実践上の諸問題として論じられる場合、常に組織問題をはらんでゐる事に注目しなければならぬ。

「……共产党は、実践上には、すべての國々の「……共产党のうう、もつとも確固たる、たゞさず推進してゆく部分であり、理論的には、フロレタリヤ運動の条件、進路、一般的結果を理解する點で、フロレタリヤー(マルシヨア)の他の大衆にささつてゐる。」(共产党宣言)
(凸一猪瀬論者)

能つて、真にマルクス主義的に打ち出された戦術は、「現在の状態」の苞葉としての「当面の目的」と「究極目的」の間に存在する断絶、俗流マルクス主義者を必らず実践上陥り

るあの二律背反への転落なら自由である。
たとえば、旧紹興主義の一潮流である改良主義は、たゞ之の「現在の状態」の彼岸へと押しやり(注1)、また、一方の空想社会主義者は、社会主義を、「現在の狀態」に対する超越論的夢想し、実践上では、マルクス主義的戦術論とは

無縫にて、即ち即興的の如きは徳田行動一藝術で終始しておられたのである。

マルクス、エンゲルスは言つ。

共产党主義者の理論的命題は、あれこれのなんでも改良屋の發明したて發見した理急だの原理たのにもどつくものではけつしてない。」（共产党宣言）

共产主義とは、われわれにとって成就されるべきならぬ人々の状態、現実がそれへ向けて形成するべきならぬ人々の理想ではない。

cut

七

「——の運動の諸条件は、一實現における前提から生ずる。」（アモイ・イチ・イチ・イチ）
「口述タリヤーの階級斗争は、「究極目的」の指定であるとともに、その現実化でもあり、従つて、その戦術論は超越的

ロヤーとのあいだを無方向にやれうすぐだけなのだ。……マ
ルクス主義の階級斗争理論は、超越的る目標設定が内在的
なものへと變える。マロレタリアートの階級斗争は、目標設定
そのものであると同時に、またその目標の実現でもあるのだ
「マルカーナロ戦術と倫理」)

注1 ベルンシコタイン主義(改良主義、修正主義)に

改良主義者は、「現在の状態」の中に「合理的」のものが、「しかるべきもの」でなければならないので、その頭の中では、「究極目的」と「現在の状態」の間にひとも深淵と断ち切る。これが「現状の打破」である。

難する。

「その著作は科學的研究であつうとしなほら、しなむか、その起草のゆきひ以前にできあつて、一品題を論証しようとしている」と、ゆるわち、この著作の基礎には一つの圖式があり、そこでは發展の到達すべき結果までにはじめから固定されていりうことに、その一二元論を居するのである。」（『社會主義の語前提』）（なんと宇野弘蔵の科學・イデオロギー論と酷似していふ事な）

「修正主義の経済的おそれと政治的進歩」当然に補足

一面的で、死んだものだと正義にも思えていたことから、強調しておく。マルクスは、アロレタシャーの戦

言ひ、「究極目的」として、常に首尾一貫して、媒介する実践的環であり、それは又、單なる抽象的・目的説定ではなく、眞正的・意識性に基づく、マルクスとエンゲルスが述べた様に「もつとも確固たる」（たゞ、追進してゆく）（即ち共産党宣言）の主体的人間的活動にせらるる（注2）。この（即ち）マルクス主義的唯物論を批判し到達した馬克思地平であり、又、旧「ミンテル」系共産党的廢敗堕落に抗して誕生した革命的左翼の「創造的マルクス主義」「ラディカルリズム」（根本性）の思想上、実践上の赤い精神でもあるのだった。

だから、「政治過程論」は「既成左翼」の「經濟決定論」に対して、60年安保斗争の現場で「政治過程の独自の運動法則の追求」と「正しい藝術」の確定という問題意識から発展せんとしたのは、極めて正当なのがいた。

そもそも、マルクスは「フレーバー」部作で、見事に分析してみせたあの革命と反革命と兩極軸とした、諸階級・諸階層の拮抗、政治過程の複雑なライナミックに関する政治理論は、曰和見主義者の疎化した頭ではも理解できぬものである。

従つて、当然の事ながら、彼等にあつては、67年10／8羽田斗争の豊かな政治的衝撃力や、88年の「5市田講堂占拠」機動隊導入を契機とする更大至甚の運動の発展や、数年間にわたる全国津々浦々の学園、職場、街頭で巻き起こったこれら実に神妙的な事件として眼づかれて得たのである。

だが、我々は、この側面の描寫とともに、即座に、左の事を指摘しなければならぬ。

る修正主義の態度であつた。而して終極目標に競争あり運動にてある丘……このベルンシユタイの標語は、多くたうしに議論よりもすつとくへ修正主義の本質をあらわす。その場合でも、自分の行動を決定し、日々の諸事件や政治上の事に順応し、ヨロシタリヤードの根本的立場と、生導本主義体制、生導本主義的進化の基本的特徴を忘れ、目前の現実の利益犠牲「する」と一れは修正主義の政策である。」（マルクス主義と修正主義全集第15巻）
又、ローラの『社会改良々革命々丘へローラ全集第一巻』も、教訓的である。

ま2 シーーーは、カール・マルクスの思想の中の
戦術論の基礎として次の様に整理して二つ。

や政治上の些事に順応し、ローレンティアードの根本的
利益と、全資本主義体制、全資本主義的進化の基本的
特徴を忘れ、目前の現実の利益と犠牲「する」と一
これは修正主義の政策である。」（マルクス主義と
修正主義）（全集第15巻）
又、ローランの『社会改良々革命』は、マルクス主義と
戦術論の基礎として次の様に整理してくる。
ま2 レーニンは、カール・マルクスの思想の中のい
戦術論の基礎として次の様に整理してくる。
1巻) も、教訓的である。

の基本的任務は、彼の唯物弁証法的世界觀のすべての民社會におして最も外臨となり、その暴力的本性を露わにする。前提に厳密に一致して規定していいだ。……「（アカ）ル・マルクス全集21巻）

3. テロトヨリヤーイテオ 防犯手帳

争の戰術字体にしてゐる「革
命的戰術」(レーイニン)の竹
置にて、つづいて

過程で、「『ローランド』アダム」「旧支配階級、反革命の反抗を粉碎するべく、革命は自ら武装して行なう。恐怖政治へ佐野茂樹『蝶起に關する覺え書き』の承認にマルクス主義の非常に重要な核心概念に當りた事は有名である。

マルクスによる、原始的社會主義の諸形態に対する革命論上の注目すべき問題提起は、近代のローランド、アダム・スミスの

筋の担い手として運命づけられてゐる事に単に指摘した点に、あるのではなく——俗流マルクス主義者は例えば、時代日本、反フタコ、唯一、無政府主義、社会革命主義への純化に於てその党派性をもつ革効率（社会党・社会同解放派）の諸君は、マルクスの思想（この程度にしか理解していない）——ヨロシタリヤードーによる眞の社会革命の諸々の要求は、ヨロシタリヤードー独裁へと開示する、その政治革命の革命的進行につけてのむ、始めて実現されるものであると指摘した点にある。市民社会の終括態としての国家は、ヨロシタリヤードー、全人民の社会革命の諸々の要求の成熟、物質、精神文通の場に、市民社会は、公然たる「内乱」の体系へと顕現する時、而

（注2）「問題意識をもつたうえで、轉じて、我々は、ヨロシクジマー一の専門論の領域を、マルクスとエンゲルス叙述した「共産主義者の当面の田舎は、ヨロシクジマー一の階級への形成、マルクス・ヨロシクジマー一の転覆、ヨロシクジマー一による政治権力の獲得である。」（二二〇）この領域へ最も主体的につなげて引き寄せて抱え返るには、

の考察は以下参照。

この事は、時代を経ておらず、レーニンの時代から、ロシア的特殊性たるのみ帰結されるのではなく、レーニンが「カール・マルクス」で要約してみせた、あの彼の戦術論を構成する一契機たる事は理解できりし、又、我々の戦術上、裏裏と極めて自益なる多くの結論を獲得する事が出来るのである。(注3)

注一 レーニンの「革新的藝術」論
レーニンは「共産主義の「左翼小兒病」」上で「革新的藝術」の言葉を用いている。二の部分である。

「大眾の間に革新的な氣分なく、一のさうな氣分の高まりを助長する諸条件がなければ、勿論革新的戰術を行動に移すことは出来ない」、われわれは、口三アで余りにも長い苦しい血戦どうの経験によりて革新的氣分又にもどづいて革新的戰術をうち立てる一とは

一 般的には、「革命的戰術」の内容は、武装暴起、労働者総力抗戦として規定出来る。

れ二〇日春夏の夏。尙お、以上の論文は池田若士氏訳で、共和国凸版同出版、一、二号、又号で出版されてゐる。この歴史と階級意識による二元論に統べて、この論文で佩えるルカーチのすぐきじい頃急は、理論戦線に於ては、第二イーダーの主流となるた、新カーネギー、マッハ主義に毒された俗流マルクス主義、修正主義の、理論と実践、意識と存在、経済とイデオロギー等の諸問題に於ける二元論に対する、マルクス主義の精神としての「革命的辯証法」を復権させ、これを武器にして、日和見主義者へ或る場合は、日和見主義、共通の根を持った一派主義へ、事実上躍りこつてゐる。

過去の人民の産げつれた歴史を別が二された社会革命の無数の要求の結晶たるヨロシタリア人民の国家への意志、「組織された暴力」は、既存国家の暴力性に勝るとの瞬間、世界史の中でも度々おとずれはしないだうが、又、必然の来る事の隨體にのみ、ヨロシタリア人民の武装蜂起—政治革命は、勝利するのである。

階級社会の死滅へ向け力強い第一歩たる、このヨロシタリーアーの歴史的行為—武装蜂起—労働者権力の樹立の人類史上にだける意義を正しく評価する事によつて始めてヨロシタリーアーの階級斗争の戦術論はその真の生動をふきこまれる。資本主義社会でヨロシタリマ革命を準備し、組織していくる革効党にとって「実現目的」の実現へ到る一連の戦術の体系の中で、武装蜂起—労働者権力の樹立といふ戦術を、單なる一つの戦術として理解してはちうなり。軍事論的表現するならば革効党の組織するヨロシタリア人民の武装蜂起は、單なる一つの戦争、戦役であらざなら、且つ、革効戦争の全局の運営を決する一つの戦争、戦役なのである。

ヨロシタリーアーにみる政治革命の実現の事を、レーニンは、戦術論上、單なる軍事と異つて「革効的戦術」(主)と呼んでいる。これに習うならば、「革効的戦術」の決定的意義は内包されていり、ヨロシタリーアーの戦術論は、理論的には、既に簡單にみた、マルクス主義國家・市民社会論かうして誤つてあり、実践的には、ワーフェン、刀・槍・火・社会革命主義と分離する事は出来ない。そして、この傾向こそ、優れ

「究極目的」と「現在の状態」との間の一貫首肯を批判する事であり、一言で言えば、歴史過程全体に占める人間の革新的実践の諸問題—戦術の諸問題に他ならない。

我々は、一一一では、ルカーの戦術論に於けるローマ主義

とし———主義の折衷的性格についてだけ触れる。

ルカーナは、理論と実践の媒介として組織開拓を進めるという立場を持ち、ローザのエイジズは、組織開拓への日向見主義に対する反対として、

レーニンの組織問題に対する厳しいう態度の方に昧方している。曰く、「ロシア社会民主党の分裂をもたらしたもののは、一方では、来るべき革新的性格のどうえ方の問題であり、したかつてこそたゞそれから生ずる任務の問題へ「進歩的」なるマルクシズム一派を結成せし、それとモ農民革命に加担してヨウタヒリう問題)であつたし、他方では組織問題だつたのであるが、二つのことは決して隔然ではない。しかし、二つの一つの問題で、元采、ひとつのものであり、相互に分離しなくて、并証法時に全体を構成しているものである事だ。當時(ローワルフ)はマルクスをも含めて一だれも理解しないなつたのである。」(『歴史と階級意識』第8章)組織問題の方法論」と。だが、ルカーキの躊躇のことは、彼の思想の最も秀れた点を表現していふのだから、彼の「過程」という言葉の中に象徴されてゐる。

即ち、ルカーキは、ヨロシタリアートの藝術論領域を、単に、「現任の状態」から「究極目的」の実現する「過程」と想定するに停つており、この点に関する限り、ローワルフの藝術論・革闘観と同一なのである。

として片付けられるものではなけりやう。

注3 レーニンの藝術論とホルラエ宣傳政黨原見の關係——レーニン曰く「この種の文章の評議——」

るホルンエライギ的組織原則の、確立に、19世紀後半以来のロシア革命運動の血の経験的教訓であった。

又、理性からだけは現実的でない「こと」の意味を持った出でこむもの達であるべく、過去の実践上の経験を常に教訓化めり努力を怠つてゐるが、

ローバーの如くのマルクス主義者達は、単に当時の「ヨーロッパ的特殊性の描寫」でもって、ボルシチック即組合原則を、常に「東歐的、ロシア的實驗」の中に押し留めていた。

今日の日本では、日本「共産党」の「大衆的前衛論」や「4/29論文」の如き、田辺見玉主義者特有の一の言い回しを發見する。

我々は、ホルシエティキ的組織原則の申たり、レーニンは自覺して「たゞマルクス主義戰術論に内包された普遍的な組織論、組織原則を抽出しなければならぬなり」へ勿論、現実的見るの組織原則は、各國の軍隊の性格の特殊性に依存してゐる。ばく、我々は、資本主義財生産様式を支配的におこなつてゐる社会、一般的な資本主義社会の下でのマルクス主義戰術論を抽出せんとしているのである。

ルカーニは、ヨロシタリーアーの社会革命の要求を政治革命を媒介にしてのみ、始めてそれが真的の意味で実現されるという事、マルキヨア独裁社会下での革命党にとって、その戦術論に於て、「革命的戦術」を極めて重要な位置を占めることが正当に把握していかなければ、

「うとうえなたなれのむら、武裝蜂起は、一の途上におけるある一定の状態においてはさひと必要な一步ではあつても、本質的には、ほのかの歩みと原理的反対で外に藝術的藝術の實質を一變換たる事だ、ということを明うなどなり……」（田代見主義と一派主義のこと）

義の折衷的性質を窺う事が出来る。

「ハニタリ一革命の経験は、すべてサンマカリヨウの理論の脱(へ)革命における党的役割)をきわめて田 瞻に教えてくれたな、それでもなお極左的主觀主義は その後長くわたしの骨肉に生きつゝけていた。……わ たしの著書『歴史と階級意識』は、この過渡期をさり めて明瞭に示しておる……」（）といふ老刀一中の痛苦 に満ちた言葉は、思想的生命力を喪失した老人の述懐

「――の歴史論は「元老院の抗争」
タウゲルト論を記述すると同時に、その過程
で既に分たる「ヨーロッパリヤー」の根本的利害

特に「革命的藝術」の実現の側面が常に媒介された藝術として指定されていふ所にある。

この事によつて、我々は、「ロレタリーティ」の藝術論の一契機たる組織論・組織原則を演繹する事が可能となる。

「一、「陰謀性」を演繹して見る。マルシヨア独裁下の社会で、「当面の目的」として「回口知」の為に、「革命的藝術」—武装蜂起、労働者権力樹立を主張するなど叫ぶ党は、既存マルシヨア法体系に対して、最も「ラドバイカル」に抗立するが故に、本質的に党は「非合法」である。

それとの対抗に規制されるところの敵の武力の優位、専門的
熟練のやるに必要とする。明らかに、闇夜性は、二軒二そな
敵の一の力を解体し、うちあるものをとして爆発するのであ
るが、第一には、闇夜性で全風野に威嚇せしめる敵と

との戦争の系統的展開のために、第二に、爆発即ち闇
夜性を最も直ちに集中・凝縮しつるよう流通、キヤナ
ライマイするための、全般的な計画性、陰謀性、及び
くてばならぬものである。(佐野茂樹)暴起に関する
の覚え書き)

党的「全国性」や、「営利商業的組織ではなく、地
区的な組織」等の諸問題も同様にして検討する事が出
来りたう。

以上で、ヨロシクジマーの軍事論領域と、「共産
主義者の立派の自説」の領域に迄引きひき、軍事論を
記述する事につけて、我々の藝術上、実践上の多くの
重要な結論が得られる事の一端を留めたであらう。
ところで、我々は、口吻にそよすく云ふて、レーニ
ンの口を借りて、武装暴起を組織する党、武装
暴起を組織する為の全国政治新聞等々と主張した事の
眞の意味をだえる事が可能となつた。

西日本交通 4号

発行日 1971 6/14

発行所 京都駅前二番

額面 50 円

運送先 京都府在京区東竹屋町

市立北野室 771-6291
12-307